



ハーベスオーディオ

アラン・ショー氏

Alan A. Shaw
Harbeth Audio
Managing Director / Designer

これまでと同じように忠実に 再生のできるシステムの開発を目指す

TEXT 林 正儀

スーパーHL5、HLコンパクト7E S・2など久々のニューモデルの登場で英国の名門ハーベスが再び注目を集めている。私も自称BBCモニターコレクターとして人一倍関心が高いわけだが、幸運にも来日中の代表者アラン・ショーにインタビューできた。ハーベスはBBCのチーフエンジニアだったH・D・ハーウッドが1977年に創立し、87年以降は当時若きエンジニアであったアラン・ショーが全面的に経営を継承。その後HLコンパクト、HL5、LS3/5

Aとその民生版であるHL・P3など次々とベストセラーを生み出した黄金の80、90年代から、どうして経営難に陥ったのか。また復活のシナリオや新生ハーベスオーディオや一連の新製品にける意気込み、特に音づくりの方向については読者も知りたいところだろう。アランは素敵な英国紳士だが、ある意味オーディオ少年がそのまま大人になつたような好奇心の固まりだ。私があいさつ代わりに見せた某誌、それはスペンドールのBC、ハーベスのHLコンパクト、

私が少し改造を加えたロジャースPM5 10といった往年の英国系モニターを並べたマイルームであったが、彼の目の色が違う。童顔になつている。「モディファイ・ユアセルフ？」しかもこの写真、「ぜひハーベスのホームページのBBCストーリーに載せたい」というのだ。即座にOKしたが、そんな彼には1995年辺りから始まったKEF、ロジャース、タンノイなどメジャーなスピーカーカーメーカの売却、再編成の嵐は寝耳に水であったようだ。またデザインの変化(脱ブックシェルフ)、ユーザーの好みの多様化などにも伝統を重んじるハーベスにはついていけないところがあった。そうした中で生産コストが高騰、やがてスピーカーの減産リストラへと。会社自体が立ちゆかなくなつたわけだ。

再生スタートにあたっては、「シンプルで長続きのするビジネスにしよう。最先端じゃなく、音楽好きな人へ向けてハーベスの音を聴いてもらうこと」をまず第一に目指したという。こうして最盛期には20名だった世帯をアランを含む少数精鋭の7名とし、社名もハーベスアコースティックスからハーベスオーディオに変更、新たな前進を始めたのである。少し前後するが、新展開として97年にはニアフィールドモニターDPM1の開発、そして日本国内には「サークル5」の名称で発売しているのはご存知かもしれない。

幸運だったのは、2003年の1月に元スペンドールの責任者であったデレク・ヒューズ(あのSA100の開発者だ)が、デザインチームとして参画してきたことだ。つまりエンジニアはアラン+デレクの最強コンビということになる。こうしてついにハーベスサウンドの伝統は守りつつも、ハイスベックオーディオに対応した新シリーズ。スーパーHL5ほかを送り出したのだ。

新生ハーベスは以前とどう違うのか、との問いに「何も変わらない。これまでと同じように忠実に音楽再生のできるシステムの開発を目指すだけ」と控えめに微笑むアラン・ショー。音づくりへの並々ならぬ自信の現れとみるべきだろう。同機のレポートは本誌38ページをご覧ください。スーパートゥイーターを加えた広帯域かつみずみずしい音の鮮度をたたえるサウンドは、新しいチャレンジを証明するものだ。なお音のベイスをなすRADIALユニットは100%社内にてアッセンブリーをし、エンクロージャーは英国北方地区のキャビネットメーカーに発注しているという。